

ビデオ 通信

2023年
12月7日(木)
No.4722

月・木曜日発行
月額：¥11,000(税込：¥11,880)
発行：飯澤剛
編集：齋藤浩一

ユニ通信社

〒114-0024
東京都北区西ヶ原 3-57-17-202
TEL：03-5422-7515
FAX：03-5422-7516
E-mail：vt@uni-press.net

パナソニック映像

映画『1789ーバスティーユの恋人たちー』のグレーディングを担当

宝塚歌劇公演を Dolby Cinema/Dolby Atmos で映画化

4K HDR で「舞台の再現」を目指したカラーグレーディング



パナソニック映像(株)はこのほど、「タカラヅカ・レビュー・シネマ 星組公演『1789ーバスティーユの恋人たちー』リミテッド上映」のカラーグレーディングを手がけた。同作品は、宝塚大劇場千秋楽で上演された宝塚歌劇団星組によるフレンチロック・ミュージカル「1789ーバスティーユの恋人たちー」を収録、映画版として編集し、最先端の立体音響技術と光学・映像処理技術によってスクリーンに再現するもの。10月に先行公開された Dolby Atmos 版(2K/SDR)に続き、11月からは Dolby Cinema 版(4K/HDR)が公開されている。ドルビージャパン(株)が Dolby Cinema 版の公開に先立って、(株)IMAGICA Lab.の第二試写室で開催した同作品の特別上映会およびトークショーでは、パナソニック映像のエディター/カラリストである石黒一哉氏が、同作品におけるカラーグレーディングについて説明。〈Dolby

Cinema 版のグレーディングでは、HDRの広色域とコントラストの高さ、4Kの高解像度を最大限活用し、照明の明暗によるフェイストーンやきらびやかな衣装など、細部にわたってシビアな調整を施し、「舞台の再現」を目指すグレーディングを心がけた〉と語った。パナソニック映像では「アート歌舞伎」をはじめ、舞台の映像制作を数多く手がけており、〈撮影から編集、グレーディング、配信・放送、オーサリングまでトータルパッケージで提供できる強みを生かしたサービスを展開していきたい〉としている。同作品の上映劇場などの情報は公式サイト(<https://liveviewing.jp/takarazukarevuecinema/>)を参照。

宝塚ミュージカルをハイクオリティな映像体験として提供

タカラヅカ・レビュー・シネマ 星組公演「1789ーバスティーユの恋人たちー」リミテッド上映は、今年7月に兵庫県の宝塚大劇場千秋楽で上演された、宝塚歌劇団星組による三井住友VISAカ

ードシアター スペクタクル・ミュージカル「1789ーバスティーユの恋人たちー」を収録、高画質・高音質の上映環境を有する Dolby Cinema と立体音響を堪能できる Dolby Atmos で上映し、ハイクオリティな映像体験として提供しているもの。配給は(株)ライブ・ビューイング・ジャパン。

今回、パナソニック映像がカラーグレーディングを担当することになった経緯として、パナソニック映像 取締役の竹内誠一氏は〈宝塚歌劇の舞台を映像や音楽媒体、オリジナルグッズや出版物などの様々な形で発信している(株)宝塚クリエイティブアーツ (宝塚 CA) のディスクメディアの多くを当社が手がけているほか、撮影を含めて 4K HDR 制作の実績があり、Dolby Cinema に対応したグレーディングも可能であることから声がかかりました〉と説明する。

映画・ドラマの「世界観の表現」とは違う「舞台を再現」するグレーディング



カラーグレーディングは、東京・天王洲にある東京制作センターの 4K/HDR/Color Grading 対応スタジオ「Studio-3」(←写真)で行われ、グレーディングソフトは Blackmagic Design の DaVinci Resolve を使用。劇場で収録した 4K データ (S-log) と、HD 用につないだ編集データを受け取り、Dolby Cinema の仕様に合わせて 4K ネイティブでカラーグレーディングを行った。

グレーディングは、同社エディター／カラリストの石黒一哉氏が担当。『シン・ゴジラ』『劇場版コード・ブルー-ドクターヘリ緊急救命-』『銀魂』『鋼の錬金術師』など劇場作品の HDR 化を手がけているが、Dolby Cinema のカラーグレーディングは初めてだったという石黒氏は〈Dolby Vision 規格は UHD Blu-ray の HDR10 と同じ PQ 方式。HDR に関してはかなり初期から手がけてきているので「初めて」という感覚はありませんでした〉と話す。

また、通常の映画やドラマのグレーディングとの違いとして「世界観の表現」と「舞台の再現」を挙げている。〈映画やドラマは、その作品の世界観を表現することに重きを置く一方、劇場で見ている観客と同じ感覚・臨場感を体験してもらうために色味を調整するといった違いに注意を払いました〉(石黒氏)

明るさの表現にこだわり／トーンの統一に腐心

「舞台を再現」する上でのポイントとして、「明るさ」の表現にこだわったという。

〈「リアルに見える明るさ」を探りました。舞台は全体的に明るい照明下で行われていますが、ソロで歌って踊るシーンでは暗い中でピンスポットの照明が当たっています。極端に明るい部分・暗い部分のコントラストがはっきりしており、見栄えがする映像になっているのではないかと思います。特に、白い衣装については、明るくし過ぎると服が自発光しているように見えてしまうだけでなく、それに影響されて顔も明るくなってしまうので、少し抑え気味にしました。Dolby Cinema の上限は 108nits ですが、フェイスストーンなどはリアルに肌の色として見えるくらいの明るさに抑え、108nits 付近は光を浴びた衣装のスパンコールやアクセサリーのハイライト部分のみとしました〉(石黒氏)。

また、沢山のカメラで様々なアングルから撮影しているため、カメラによって明るさや色に差が

出るほか、現場のカメラマンはリアルタイムで明るさを調整しているため、同じカメラでもカットごとに明るさも変わるという。石黒氏は〈Dolby Vision によって光を表現する幅が広がったことで、その差が顕著に現れてしまうので、全体を統一させるためカットごとに明るさや色味を変えていく、かなりシビアなグレーディングになりました。さらに、宝塚独特のメイクも悩みどころでした。舞台なので元々派手めに見えるメイクですから、常に少し抑え気味にしないと違和感になってしまいます。特に寄りの画でフェイスの色が出過ぎないように調整しました。極度な明暗、暗い中で明るさ表現はダイナミックレンジが広い Dolby Cinema の真骨頂とも言えます〉と振り返る。



石黒一哉氏

また、〈一般的な Dolby Cinema 作品の中には、4K で撮影して、2K で完パケしたものをアップコンして 4K にしているものもありますが、今回は 4K で撮影したものを 4K でグレーディングしているため、解像感が格段に良かった。宝塚 CA さんからも「細かいディテールまで配慮したグレーディングによって、衣装や背景の布などの模様までくっきり見え、伝えたいものをすべて見せることで実現する世界観が作れた」と好評を得ました〉としている。

なお、今回は Dolby Cinema 版（4K HDR）とともに Dolby Atmos 版（2K SDR）も同社がカラーグレーディングを担当している。〈最初に Dolby Cinema 版を制作した上で、Dolby Vision のトリムパス機能を用いて SDR 版のルックを作り、現場の状況が最適に表現されている Dolby Cinema 版と比較しながら、ワンカットずつ細かい設定を調整していきました。Dolby Cinema 版と全く同じではありませんが、SDR 版として楽しんでいただけるものができたと考えています〉（石黒氏）

ライブの撮影／配信／収録からグレーディング、オーサリングまでトータルで提供できる強み

舞台作品などにおける Dolby Cinema の今後の可能性について、石黒氏は〈昨今、舞台を劇場公開する映像は増えてきていますが、Dolby Cinema で公開されている映画はまだ少ない。Dolby Cinema はダイナミックレンジの幅が広く、世界観までしっかりと表現するような色の作り込みができるので、Dolby Cinema としての上映は、舞台愛好家にもすごくいい体験になるのではないかと思います〉とする。

竹内氏は〈当社は、ライブの撮影／収録／配信から、記録したデータでカラーグレーディングして映画にしたり、オーサリングしてディスクにするサービスをトータルパッケージとして提供できる強みがあります。今回、舞台モノに対する可能性は確実に高いと感じました。宝塚や歌舞伎だけでなく、音楽のメジャーアーティストなどチケットが取れないようなレアな公演を、映画館で観て、最終的にはメディアにして手元に残したいというニーズはあると思います。チャンスがあれば、ぜひ手がけてみたい〉と話している。



竹内誠一氏

◇パナソニック映像 <https://group.connect.panasonic.com/pvi/>

◇ドルビージャパン <https://www.dolbyjapan.com/>